



GIGAびより

ICT*AT*AAC*DX*etc.



中原特別支援学校 ICT
活用広報誌
発行 ICT教育支援部
No.20 2026.2

📍 とことん！DropTap



冬季休業中に、コミュニケーション支援アプリ「DropTap」に係る公開研修会を実施し、県内外の学校等15か所から参加がありました。基本編と応用編に分けて、編集やボードの作成など演習を中心に行いました。リンク機能の演習では、複数のコミュニケーションボードを使って、痛みやかゆみの部位を伝える、本や行先を選ぶなどアイデアが出てきました。また、県外からの参加者に事例を紹介していただき、参加者同士の情報交換の場にもなりました。他の参加者と交流しながら、ひとつのアプリをじっくり使う時間を設けたことで、新たな発見や発想があり、明日から使える支援を学ぶことができた研修となりました。

DropTap は、GIGA スクール構想で導入された端末には無償提供されています。ぜひ使ってみてください♪

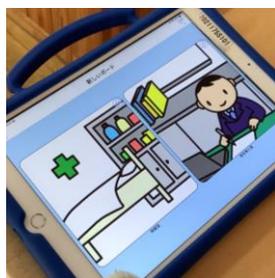
<参加者アンケートより>※原文のまま掲載

- ・さっそく朝の会の司会で使っているドロップタップに、今日学んだリンク機能を活用したいです。(特別支援学校)
- ・1日とても楽しかったです。やりたいことが浮かびました。(特別支援学校)
- ・ゆっくり作成でき、周囲の先生方のボードも見ることができ、アイデアをもらった！(特別支援学校)
- ・ICT活用が苦手な私でも、児童の気持ちを代弁してくれるツールが作れたので、「やってみよう！」という気持ちになりました。(小中高等学校)
- ・初めて使ったアプリでしたが、いろんな授業や学校生活で使えそうだと思います。(小中高等学校)
- ・スケジュールの作り方、リンクの仕方、さっそく使います。(小中高等学校)

研修の様子を紹介しています★

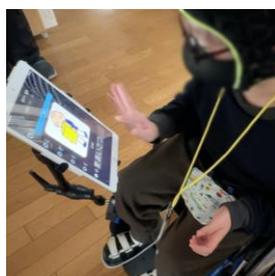
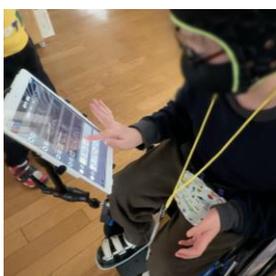


📍 使ってみた！DropTap ～校内での活用の様子～



★係の仕事での発声代替手段

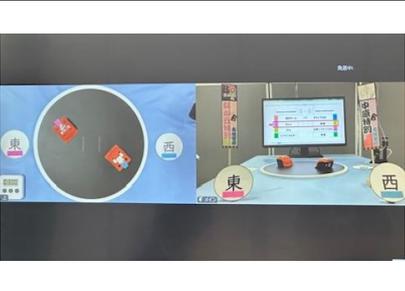
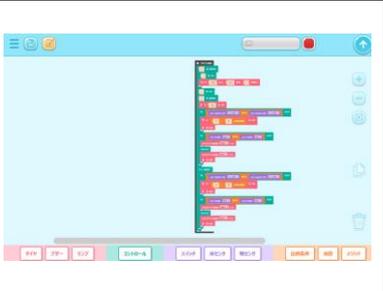
職員室や保健室で用件を伝えるための手段として活用しています。行先のシンボルをタップすることで、【保健室】→「健康観察を提出に来ました。」、【職員室】→「配布物を取りに来ました。」と、行先に応じた用件を、自分ができる動きで伝えることができます。リンク機能を使うことで、退室の挨拶も自分のタイミングで伝えることができます。



★音声リマインダーとしての活用

スケジュールボードを、手順と“具体的に何をするか”を自分で確かめるための手段として活用しています。例えば、「渡す」スケジュールをタップすると「どうぞと言いながら渡しましょう。」と再生され、行動の手掛かりとすることができます。また、終了したスケジュールは自動でチェックされるように設定することで、次の手順をすぐに確認できます。

🔗 中学部 病弱通常の学級 「ロボットプログラミング選手権」全国大会出場！



中学部 病弱通常の学級 3年生は、技術の授業の一環で、「ロボットプログラミング選手権」に出場しています。授業では、自分が意図した動きになるよう、プログラムを試行錯誤する姿が見られました。12月に行われた九州地区大会に2チームが出場し、3・4位に入賞、全国大会への出場となりました。

🔗 情報モラル教室 「インターネット上の人権侵害」



佐賀県教育委員会事務局 学校教育課人権・同和教育室 指導主事 野口 彰浩 氏を講師にお招きし、高等部生徒を中心に「インターネット上の人権侵害」をメインテーマにした、SNSを用いた犯罪や、生成AIによるフェイク情報の危険性など、近年の社会問題について、生徒たちの意見を聞きながら、クイズや動画などを交えてご講話いただきました。卒業を控える3年生は、自分のこととして真剣に話を聞いていました。生徒の感想には、改めてネットの危険性や学びの必要性を再認識したものが多く見られました。

<生徒の感想より>

犯罪やトラブルに巻き込まれないためにネットの情報はあまり
 惑わされないようにしないと学びました。
 AIなども発展していく中で情報を見抜く判断力が自分だけでなく全ての人に必要になってくるのかなど
 思った。

🔗 etc.



久留米工業大学「地域課題解決型 AI 教育プログラム」に参加し、共同で「特別支援学校向け AI レジスターの改良と校外販売会での運用支援」に取り組んでいます。これは、中学部の作業学習で製品販売の際のタスクを軽減し、生徒が安心して、落ち着いて清算業務に取り組めることを目指したものです。画像認識 AI を用いた製品タグ（値札）や受取金額の読み込みを実装しており、今年度は、実際に校外販売会での実証を行いました。生徒たちが分かりやすいように、開発学生たちが UI（操作画面）の工夫も行ってくれました。



県教育委員会主催「令和 7 年度教育における ICT 活用事例発表」において、本校の事例「特別支援教育と生成 AI ～生成 AI は特別支援教育教員の福音となるか～」が、校務 DX 部門で最優秀賞を受賞しました。事例については、佐賀県の web サイト「SAGA E コネクト」に掲載されています。



SAGA E コネクト

<ICT 教育支援部主任のつぶやき>今年度も早いもので終わりを迎えようとしています。生成 AI の普及など、テクノロジーの発展が一段と目まぐるしい一年でした。さて、2018 年「魔法のプロジェクト」(SoftBank・東大先端研)での中邑賢龍氏の言葉を一部紹介します。【タブレットは触れば画面や音の変化を生む。スキャン入力と組み合わせればスイッチ操作が偶然の動きによるものであっても、それがまるで子どもの意思のようにスクリーンにメッセージを示し、音声を発して見せる。専門家であるがゆえに我々は子どもの能力を冷静に総合的に見つめる必要がある。】我々が ICT を活用しようとするとき、それは本当に児童生徒の「分かる」「できる」になっているか。教育に生成 AI を活用しようとするとき、それはただの生成物になっていないか。テクノロジーが発展すればするほど、本当に大事なものは我々の専門性であることは言うまでもありません。おっと、この文章も ChatGPT かもしれませんよ。ふふふ。

